

## 野坂悦子さんに聞く 紙芝居の演じ方

紙芝居は、どんなふう演じるといいのでしょうか？  
紙芝居の特性、作品の選び方、下読みの方法、演じ方のポイントなど  
これさえ知っていれば大丈夫！ みなさんも、紙芝居を演じてみませんか？

## 紙芝居の特性

紙芝居には、大きくふたつの特性があります。

ひとつめは、作品世界が現実世界に出ていって広がるということ。紙芝居が始まる前には、演じ手も観客も現実世界にいるわけですが、演じ手が舞台から場面を抜いた瞬間から、作品が現実の世界に広がっていきます。紙芝居の名作は、この「広がっていく」という特性を生かしてつくられています。

もうひとつの特性は、集中とコミュニケーションによって、演じ手と観客、観客同士の、作品世界への「共感」が生まれることです。紙芝居では、絵を抜き始めるとまず、次の場面への集中が起こります。そして、その集中は、絵を差し込むことによっ

て安定した継続的な集中に変わります。

さらにそこに、演じ手と観客が向かい合うことで、作品を通じたコミュニケーションが起こります。特に、「観客参加型」といわれる種類の紙芝居では、「さあ、みんなも言ってみよう」というように、直接コミュニケーションをとることができます。また、「物語完結型」といわれる種類の紙芝居でも、おはなしが進む中で、演じ手と観客は、お互いの表情を見たり、間を感じ合うことでコミュニケーションをとることができるのです。

出ていき広がった紙芝居の世界を、演じ手と観客が一緒に楽しみながら、共感を持って受け止めていく。そうした紙芝居の特性から、紙芝居ならではの演じ方が導きだされます。

## 演じる前に

演じる前にまず大切なのは、作品の質を考えることです。「生きた意味と喜び」が追求され、深められている作品かどうか。演じ手が共感できる内容かどうか。作品のテーマがみんなで見えて共感できるものかどうか。そして、先ほど述べた「紙芝居の特性」が追求されている作品かどうか。これらの観点から、作品を選ぶことが重要です。

作品を選んだら、必ず下読みをしてください。下読みでは、文章だけを読むのではなく、絵も読みとおはなしを味わってください。絵と文章を両方並べて読む方法もありますが、私はよく鏡を使います。そうすると、絵を見ながら裏面の文章を

読めるし、読んでいるときの自分の表情も見ることができからです。ただし鏡だと、絵が左右逆になってしまうことに注意が必要です。

それから、画面が順番どおりになっているかどうか、事前に確認してくださいね。

## 演じ方のポイント

さあ、いよいよ紙芝居が始まります。演じ手は舞台の横に、観客と向かい合って立ちます。舞台の後ろに隠れる人がいますが、そうすると声は聞こえにくいし、観客とのコミュニケーションがとれません。観客から見て、舞台と演じ手が一体となるような、ちょうどいい立ち位置を探してください。

「声色を使ってもいいの？」と、よく聞かれますが、演じ手の持っている自然な声で演じてください。紙芝居の多くは、台詞を中心に進行していくので、確かに人物を演じ分ける必要はありません。たとえば、山姥と小僧さんのおはなしなら、それぞれの人物の気持ちになれば、山姥は少しゆつくりと、小僧さんは子ど

もらしくというように、声の高さや話す速度も自然に変わってくるはず。無理な声色を使う必要はありません。声色を使うと、演じ手だけが目立っておはなしに集中できず、おはなしの世界を壊してしまう危険性があります。同じ理由で、作品世界を離れたパフォーマンスはやめましょう。

始めるときは、「さあ、おはなしが始まりますよ」というように、声をかけましょう。そして、「みんなに見せたい大事なものが、この中に入っているよ」というような気持ちで、一枚一枚丁寧に三面開きの舞台の扉を開きます。

画面を抜いて差し込むときに大事な「間」を大切にすることです。沈黙の時間が、観客の心の扉を開き、作品世界の深まりをつくりまします。

かといって、すべて同じように間をとっていると単調になるので、スピードに変わるところと、じっくり見せるところで変化をつけてください。抜いて差し込んだあとの間を大切にすれば、おのずと演じ方は変わってきます。

作品が終わったら、「おしまい」とはっきり表現してください。作品は現実の世界に強く出ていくので、余韻を込めて終わりの言葉を言い、舞台の扉を一枚一枚閉めていってください。

## 紙芝居はコミュニケーション

紙芝居の演じ方は、裏面の下段に、「演出ノート」が書いてあることが多いので、まずはそのとおりに演じてみてください。それから、いろいろな人の演じ方を見て、いいなと思ったら、「どうしてそう演じたの？」と聞いてみるのです。観客の年齢によっても、その場の雰囲気などでも、演じ方は変わっていきます。紙芝居はコミュニケーションで演じるものなので、基本はあっても、観客と演じ手の関係によって毎回違ってきますし、そこがむしろいいところだと思います。

最近、これこそ紙芝居の出番だなと思っていることがあります。日本の学校でも、海外にルーツを持つ子どもが増えています。観客参加型の紙芝居を演じるときに、たとえばみんなで言

う台詞の一部を、その子の母国語にしてあげたら、うれしい一体感から、共感の喜びが育っていくのではないのでしょうか。

## おすすめ参考図書



## 『紙芝居の演じ方 Q&amp;A』

著/まついのりこ  
1,200円(童心社)  
紙芝居を演じる際のさまざまな疑問に、わかりやすく答えるQ&A。



## 『紙芝居百科』

企画制作/  
紙芝居文化の会  
1,300円(童心社)  
紙芝居の魅力、絵本との違い、演じ方、国際的広がりなどを網羅。